

摘した。ハイラーの祈り論はこうした宗教理解を乗り越えようとする可能性を持つ。両者の区別のない「叫び」を祈りの起源と見なそうとするそのねらいはプロテスタント的宗教概念批判としても興味深いものだが、他方でそこに自らの理想とする宗教性(福音主義的カトリック性)を読み込んでいったところにその限界があった。

フォーマットとしての宗教施設

——ブルーリズムと宗教の役割——

松野 智章

宗教／宗教施設の役割について、政治哲学者のW・コノリーのブルーリズム(多元主義)の観点から捉え直したい。コノリーはT・アサドを引用しつつ、世俗主義の論理の脆弱性を指摘する。世俗主義国家の論理は抽象的で空虚であり偽善であるという。しかし、その批判は、多文化主義的視座のように諸宗教を保護するという形式のものではない。リベラルのように線引きをして一律に正教分離を強制するのではなく、前向きに個々の信仰のエートスを肯定するのである。重要なのは個々の信仰であり、キリスト教、仏教、神道という諸宗教の抽象概念ではない。諸宗教が信者に対して権力性を帯びるとき、個体を抑圧する可能性を考慮するからである。多元主義は、文化相対主義や絶対的な寛容、あらゆる基準の放棄などではなく、文化を同心円性の次元だけで定義しないだけである。つまり、主体は個体にある。

コノリーの思想を考慮しつつ世俗主義の問題とモラルの問題

に顧みるとき、世俗主義には公教育を除けば、個人に徳性を反省させるシステムがない。それ故に、コノリーのいう宗教的エートスを育む場としての宗教施設が重要になる。

具体的なサンプルとして「神社」を分析する。神社は、寺や教会とは著しく異なる点がある。神社は、参拝者と宗教者(神職)、または参拝者間における「神道」理解の差がはげしい。

その原因は、宗教者と参拝者の宗教言語の繋がり希薄さが決定的な要因である。つまり、仏教やキリスト教に対して言説の共有が欠けている。儀礼宗教と称せられるように、儀礼における参拝者の行動の一致は見られても、その内実が同様のものであるかは分らず、むしろ多様性を有しているのである。これは、神職間でも同様である。つまり、神社のコンテンツは各人が持ち込むものであり、神社は祈りの場としてのフォーマットとして機能していると分析できるのである。

ここで、八〇年代のサブカル論的に「初音ミク」を取り上げないわけにはいかない。初音ミクはボーカロイドと言われるコンピュータ上のCGキャラクターであるが、アニメのキャラクターのように人格設定がなされていない。あくまでもユーザーが初音ミクに人格を与える。そして、このようなキャラクターがコンサートを開くまで発展した文化的事象は、世界に例を見ない。この象徴的事例は、「初音ミク」が神社と同システムにあることを教える。それは、初音ミクの内実をユーザーが作り上げるのと同様に、参拝者が神社のコンテンツを充実させるからである。コノリーとの接点は、ここに神社と参拝者の権力構造は生じず、あくまでも参拝者が各々宗教的徳性を育む場と

して機能している点の強調にある。

コノリーの思想はラディカルであるが故に、理想論と言わざるを得ない点も多い。さらに、今日は、ポスト・ポストモダンと言われ、大きな物語が終焉し、いや、むしろ、すべてが言語ゲームにすぎないと了解されたからこそ、人々が物語に安住しようとする、いわば右傾化（ナシヨナリズム化）の様相を見せている時代である。

しかし、そうであるからこそコノリーの議論は今も尚重要であり、プルーリズムの観点からの宗教／宗教施設の役割の分析は、宗教研究においても意義を持つものである。

多元主義の社会的文脈における作用実態と将来への展望

渡辺 光一

教団に所属する（信仰者）かしない（非信仰者）か、宗教への関与が相対的に強い弱い、という二つの軸から四つの象限を考えると、宗教学者の主たる関心は、①教団に所属する強い関与者（「立派な信仰者」）に向けられてきたが、近年では②教団に所属しない強い関与者（いわゆる「スピリチュアリティ」）や③教団に所属しない弱い関与者（いわゆる「無自覚の宗教性」）にも向けられている。しかし、④教団に所属する弱い関与者（「緩い信仰者」）にはほとんど関心が向けられず、肯定的な評価もなされなかった。一方、教団に所属する信仰者について、他宗教に対して寛容のか非寛容のかという軸を追加して四つの象限を考えると、宗教学者の考える理想は、強い信仰を持ちながら他宗教の内容と価値も理解する多元主義的で寛容

的な信仰者であり、それこそが「真に立派な信仰者」と見做され、宗教間対話などの動機となってきた。これは、「強い多元主義」と同様の観点から、「他者の信仰を学ぶことで他者との差異を通じて自分自身の信仰を深めることができる」という論理で補強されることもある。しかし、様々な宗教を学べば学ばほど宗教間の教義的な共約不可能性をより認識するのだから、本来は学ぶことは何の解決にもならないはずである。このような懸念に関しては、「真理（真実在）」を会得すればそれが根本において同一であることが自覚できる」という反論もあるだろう。しかし、真理（真実在）を会得しその根本的同一性を理解したから寛容になったのか、寛容になったふりをしているだけなのか問題である。教義的な共約不可能性を解消できるほどに真実在を会得することは、常人の域を超えているはずである。仮に、真理（真実在）を会得し根本的同一性を理解した人がいるとしても、そのような「真に立派な信仰者」はごく例外と考えたほうが自然ではないだろうか。自称多元主義者の多くは真実在の根本的同一性を理解したと錯覚し、疑似的寛容性を示しているだけかもしれない。もしそうであるならば、彼らの信仰の強さ自体が錯覚に基づく欺瞞である可能性もあり、「スピリチュアリティ」もまた同様であるかもしれない。単純に考えても、関与と寛容性は逆相関にあるだろうから、「強い多元主義」の現実味は疑わしく、好事家の理想的願望に基づく単なる虚構に過ぎない可能性もある。

筆者らの行なってきたいくつかの社会実験は、そのような可能性を示唆するものである。実験計画的に合成された宗教的体